講義年月日　2008 年 1 月 28 日
講演者　加藤　好郎氏（慶應義塾大学国際センター事務長）
テーマ　ケースメソッドを用いた図書館員教育の有効性
昨年 2007 年 1 月に行ったケースメソッドを用いた討議の 2 回目として行った。
ケースメソッドの実施方法
1. グループごとにサンプルをとる方法→前回行った方法
2. 段階的に結論を導く方法→今回行った方法
　個人の結論→グループの結論→クラスの結論への過程で変わっていく結論に、その都度納得できたかどうかを認識すること。

ケースメソッド「大学図書館の一般公開」
①　メリットとデメリット
　それぞれについて検討する。
・ 図書館にとって
　要求により本を買うことで、蔵書が増えるが、学生・先生の本が買えない。
　学術書と一般書の区分けをきっちりした基準を作る。
　一般書の蔵書が増えることで、学生の利用が増えることもある。
　大学と地域の図書館とで選書基準を作り変える。
　公共図書館で買うものは大学図書館では買わない。
　逆に、公共図書館の専門書を引き受ける。
　コレクションビルディングにつながる。
　コレクション担当者の成長にもつながる。
・ 図書館員にとって
　選書業務が良くなる。
　業務量が多くなる。
　運営体制を変える。その財政基盤として貸出料をとる。
・ 大学にとって
　評価が上がる。
　施設利用よりも資料を貸し出すことに重点を置く。
　大学の公開。

②　サービス体制について検討する
　開館時間　利用者は土曜日に集中、日曜、祝日は必要ない。
　利用者制限　20 歳以上で他大学の所属無し、研究を目的とした人。
　館外貸出料金を徴収。年間 6000 円（月 500 円の計算になる）
　データベース利用はだめで、閲覧スペースのみの利用。

蔵書はあくまでも学生と研究者のものであるのが、ＯＰＡＣを共有化して蔵書を提供化する。
→　コンソーシアムにつながっていく。